「姉さん」
夕暮れの海辺という最高のロケーションでの楽しいデート中、正面の方から歩いて来た青年にそう呼ばれた。わたしを見つめる目を見て、疑いなくそう言ったのだと思った。目には大きな驚きと薄い感動のようなものが見えた。
わたしがおどろきで固まったいたのはそう長い間じゃなかった。知らない誰かにそんなふうに呼ばれることに、わたしは心当たりがあった。ただ、わたしはもうあきらめていたから、うまく言葉が出せなかった。
「姉さん……？　いま、エリィのことをそう呼んだのか……？」
わたしの手を握る彼――――ジャーニーの力がすこしつよくなる。彼はわたしの事情を知る数少ない人物のひとりだった。彼はわたしのボーイフレンドだった。
彼は青年とわたしの間に立ってくれた。
青年はたじろいで、一歩距離を空けた。
「君は、誰だ。君は、エリィの……何だ」
ジャーニーの威圧するような質問に、青年はしばし答えに迷う。ジャーニーが我慢を切らしてさらにつよく問い詰めようと口を開いたタイミングで、やっと彼は答えた。
「俺――――いえ、私は……私には、かつて姉がいました」
ドキリ、と心臓が鳴った。やけに喉が渇いた。
わたしには七歳以前の記憶がない。
「ただ、彼女とは戦争による混乱の中で離ればなれになりました」
わたしが見つかったのは国をまたぐ輸送列車の中からだったらしい。そして、わたしの一番昔の記憶は孤児院のカビ臭いベッドだ。
パズルのピースがはまっていくような感覚がした。
「……同情はしよう。ただ、エリィがその生き別れてしまった姉だと言う証拠は？　それに、本当に君がそういう経験をした証拠は何かあるのか？」
「写真が……」
「あるの？！」
ジャーニーの後ろから飛び出し、青年の両肩を掴んで訊いた。見開かれた青年の目は申しわけなさそうにゆっくりとそらされていき……。
「家に帰れば……」
今は無いらしい……。
「でも、二週間待って頂ければ写真を持ってここに来れます。それを待って頂けませんか？」
わたしはそれを快諾し、ジャーニーもそれをやさしい目で見ていてくれた。
ちょうど二週間後、空港で爆破テロ事件が起こった。
わたしは、いくつかのものを失ったのかもしれなかった。